泉州鯉城区（福建省）の住居類型とその分布に関する考察

CONSIDERATIONS ON DISTRIBUTION OF HOUSE TYPES OF LICHENG DISTRICT (QUANZHOU, FUJIAN)

趙 冲*, 布野修司**, 川井 操***
Chong ZHAO, Shuji FUNO and Misao KAWAI

This paper clarifies urban formation and distribution of house types in the city of Quanzhou in Fujian. Quanzhou which is known as Ci Tong, had developed as a port city since the period of Tang Dynasty. Authors selected the old castle district of the central part of Quanzhou called as Li-cheng Areas for an intensive field study and discussed the spatial formation and typology of house.

There exist three types of traditional houses which are da-cuo, shou-jin-liao, qilou, in quanzhou. Da-cuo is the form of quadrangle, si-he-yuan and Qilou is the form of shophouse with arcade. Da cuo mainly are located on the periphery of the inner cities. Shou-jin-liao are distributed on the south of the cities. Qilou which is a relatively new style of shophouse, are distributed along the street of Zhongshan south road. This paper clarifies the characteristics of distribution of house types and the urban formation process of Quanzhou city.

Keywords : *Quanzhou, Licheng, typology of houses, dacuo, shoujinliao, qilou*

泉州, 鯉城区, 住居類型, 大厝, 手巾寮, 騎樓

1. はじめに

1-1 研究の目的と背景

本稿は、土地の形態とそれをもとに成立する建築の型、さらにそれが集合することによって構成される街区の形態と地域社会組織形態をテーマとする都市組織研究の一環として、福建省の泉州市^{注1)}を対象として、鯉城区の住居類型およびその分布を明らかにし、その都市形成過程とその変容の特質について考察することを目的としている。また、本研究は中国都城研究の一環として、さらに「店屋 shophouse」の比較研究の一環としても位置づけている。

泉州は、いわゆる「海のシルクロード」の窓口になった港市であり、イスラームも早くから伝えられた^{注2)}。南宋時代には中国人の海外発展の一大根拠地となり、アラブ人など多数の外国人が居住する「蕃坊 fan fang」と称する居留地が河岸に沿って設けられていた。元代には、マルコ・ポーロ Marco Polo やイブン・バットゥータ Ibn Battuta が「ザイトゥーン（刺桐）ci tong ^{注3)}」という名で、世界一繁栄している港市としてその盛況を伝えたことはよく知られている。

元代にそれ以前の城郭を拡大して「新羅城」が建設されるが、その城壁は、1934（民国 23）年に撤去されるまで、明清時代を通じて維持された。現在の泉州中心部である鯉城区は、その名の通り、鯉の形を街路パターンに残しており、「新羅城」の形態をうかがうこと

ができる。中国の歴史的都市は急速に変容しつつあり、その基本特性を建築類型学（ティポロジア）の方法を明らかにすることは、今後の都市地域計画を考える上で大きな意義を有している。

本稿では、まず諸文献をもとに泉州の都市形成史を概観する。そして、泉州市城郊規画局が作成した 1/5,000 の地図（2007 年）および Google Earth の地図画像（2009 年）をもとに鯉城区全体について、施設分布とともに、「大厝」「騎樓」「手巾寮」という 3 類型を

図 1 泉州と鯉城区の位置

* 滋賀県立大学大学院環境科学研究科 博士後期課程・修士

** 滋賀県立大学大学院環境科学研究科 教授・工博

*** 北京 UAA 建築設計公司 博士(環境科学)

Graduate Student, Graduate School of Environmental Planning, University of Shiga Prefecture, M. Eng.

Prof., Graduate School of Environmental Planning, University of Shiga Prefecture, Dr. Eng. Urbanization Architecture Atelier Beijing, Dr. Eng.

中心に、住居類型の分布を明らかにする。この分布図によって、鯉城區の都市形成過程およびその変容過程を明らかにすることが出来る。さらに、鯉城區の中心街區である通政・和平・海清・新峰・新春社區についての詳細な臨地調査を基に、社區構成および住居類型とその分布を明らかにする。

1-2 既往の研究

泉州に関する一般の文献として陳泗東（1991）がある。また、泉州港務局、泉州港口協會編（2005）、編集委員會編（1994）などがある。建築系の分野では、曹春平（2005, 2008）が閩南建築の特性を詳細にまとめている。さらに、閩南民居建築に関する黃漢民の一連の研究（1994abc, 1995ab）がある。

2000 年以降、住居類型を対象として、実測調査によって建築形式を記録・整理する研究が数多く見られる。「騎樓」に関するものとして、一連の許政（1998）、林冲（2000）、朱啓明（2005）による研究がある。許政（1998）は、泉州の「近代騎樓」と「当代騎樓」を比較し、その違いに焦点を当てている。林冲（2000）は、「騎樓」の発展と形態についてまとめている。朱啓明（2005）は、泉州市中山南路に現存している騎樓 54 軒を実測し、その空間構成の特性について総括している。

「店屋 dian wu」^{注4)}あるいは「街屋 jie wu」^{注5)}に関しては、17 世紀以降の断続的な移民によって台湾に持ち込まれたという背景もあり、台湾人研究者の関心が高い。特に注目されるのは、国立雲林科技大学のチームによる泉州（福建）—鹿港（台湾）の街屋比較研究で、蔡亘騏（2006）などがある。蔡亘騏（2006）は手巾寮 29 軒を実測している。また、「大厝」をめぐるのは、趙鵬（2004）など

がある。

本稿は、以上の既往研究を踏まえ、既往の研究が対象としていない鯉城區の中心街區についての臨地調査を加えることで、泉州の都市空間構成の全体を、住居類型およびその分布に着目しながら明らかにする大きな意義を有している。

1-3 調査概要

臨地調査は、2008 年 8 月 19 日～29 日および 2010 年 12 月 14 日～28 日に行った^{注6)}。調査は泉州市鯉城區の中心街區を対象とし、泉州市城郷规划局作成の都市地図（1/5,000, 2007 年）をベースマップとし、施設分布調査、建築形態調査（建築階高、構造形式）を行い、33 軒（大厝 18 軒、手巾寮 15 軒）の住居について実測調査と家族構成、建設年代などについてヒヤリング^{注7)}を行った。

2. 泉州の都市形成

泉州は、東北から西南にかけて、清源山、紫帽山、双陽山、羅裳山の山々に囲まれ、山々の間は深い峡谷、あるいは盆地を形成している。西北から東南にかけて、晋江そして洛陽江が流れ、泉州湾に流れ込む東南部の海岸線は入りくんでいる。すなわち、良好な港市としての条件を備えていた（図 1）。唐末の戦乱で、陸のシルクロードが衰え、福建を窓口として海のシルクロードが繁栄することになる。その拠点になったのが泉州である。

福建は、古代には「閩」人が居住しており、戦国時代に楚に滅ぼされた越王族が逃げ込んで以降、「閩越」と呼ばれてきた。秦に征服されて紀元前 221 年に「閩中」郡が設置されたが、秦末の動乱期に「閩越」国として独立し、東冶（現・福州）に都を置き、92 年にわたって漢に抵抗したが、武帝に滅ぼされることになる。

非漢族はその後も長く勢力を保ったが、福建

東部（福州とその周辺）と福建西北部（建州とその周辺）に漢族による開拓が進み、唐代半ばまでには両地域は結びついた。福建の漢化を決定づけたのは、唐代後期に海外貿易が盛んになり移住者が増えてきたこと、加えて中原の戦乱を避けて様々な階層の漢人がこの地に移住したことによる。王審知^{注8)}によって 909 年に建てられた「閩」のもとで、福建の開発が進められた。945 年に「閩」は南唐に合併される。中国人の海上活動は、唐半ばにはじまり（8～9 世紀）、北宋中期から画期的に展開し（11～12 世紀）、やがて元・明代にかけて（13～16 世紀）、海上帝国がうち立てられることになる。

泉州の都市空間の形成過程を、諸文献をもとに本稿に必要な範囲でまとめると、図 2 のように示すことができる^{注9)}。泉州に関する歴史的地図は『泉州府城池図』（泉州府志）のような古図が残されているだけである。

①唐代、906（唐天佑 2）年に王氏政権によって、「子城」が造られる。唐旧城とも呼ばれ、城壁は全長 360 歩^{注10)}で、東に行春、西に肅清、南に崇陽、北に泉山の 4 つの門があり、城内に

図 2 泉州・城郭区域の変遷

は、東西方向に走る西大街（現西街）と東大街（現東街）によって、北と南に分れ、北に州衙が置かれ、南が街坊であった。また、街坊は東西と南北の街路が中央で交差する十字街であった^{注11)}。城壁外部には開元寺^{注12)}が既に建設されていた。

②五代南唐保大年間（943～957 年）に、清原軍の使節である留從効によって、防衛のため、「子城」が拡大された。新城は「羅城」と呼ばれ、「子城」にあたる内城と「羅城」にあたる外城の 2 つによって構成されることになる。羅城壁の全長は 20 里、城壁の高さは 1 丈 8 尺^{注13)}であり、城門が 7 つ^{注14)}設けられた。羅城にも東西方向に走る新門街—涂山街（現涂門街）と南北に走る南街（現中山路）が中央で交差する十字街が形成されていた^{注15)}。

③1087（元佑 2）年、泉州に貿易官庁である市舶司が設置され、城外には蕃坊、蕃人街が形成された。イスラームも伝えられ、1009（祥符 2）年には清淨寺^{注16)}が建設された。商業の中心となったのは、城南の鎮南門外である。1230（紹定 3）年、郡守である游九功によって「翼城」が造られた。1352（至正 12）年、監郡の契玉立が羅城を拡大し、「新羅城」が形成された。北の朝天門、東の仁風門、西の臨漳門、東南の通淮門は移動していないが、仁風門と通淮門の間に小東門が設けられ、西南の通津門は晋江の北岸へ移されて「南熏門」と改称され、南城壁は天后宮のところまで拡張された。鎮南門は「德濟門」と改称された。新羅城の周囲城壁は 30 里となり、高さは 2 丈 1 尺とされる。

④その後、城壁の改造が何回か行われたが、城壁の形態はほとんど変わらなかった。1658（清順治 15）年、提督馬督功、知府陳秉直によって、城壁はさらに東北方向に拡大された。また、城内に東西南北に 4 つの「隅 yu ^{注17)}」が形成された。

1923（民国 12）年に「旧城改造計画」^{注18)}によって城壁は撤去され、道路が拡幅されるなど都市改造が行われた。唯一残されたのは北門街にある「朝天門」である。この時、城区内の中軸線となる中山路が形成され、「騎楼」が街路の両側に連続的に建てられた。

⑤現在の幹線街路体系は「四横四縦一環^{注19)}」と言われる幹線街路によって構成されている。

3. 鯉城区の空間構成

鯉城区^{注20)}は、中唐以降、泉州の中心であり、現在も歴史的建造物が多く残されている泉州の中心区である。そして、以上の都市形成の歴史をその骨格にある程度残している。まず、鯉城区の現況を明らかにしたい。

3-1 鯉城区の社区構成

中国の他の地域と同様、現在の行政組織は、基本的に省→市→区→街道弁事処→社区によって構成され、社区が最小単位となる。

現在、鯉城区は、4 つの街道弁事処からなり、この 4 つの街道弁事処は計 38 の社区によって構成されている^{注21)}（図 3）。各社区には居民委員会が設置され、組織委員によって管理が行われている。社区の機関には党支部、住民委員会、議論監督委員会、計画生育協会、治安調停委員会、管理事務所、社区团支部、婦人連合会、身体障害者連合会など 20 余りの機関があり、運営されている。社区は、街路を中心に両側町の形で形成され、街区を割るかたちで構成されるのが一般的である。

3-2 施設分布

近年の都市開発によって、鯉城区の様相は大きく変わってきている。鯉城区の行政施設、商業施設、教育施設、医療施設、宗教施設などの施設分布は図 4 に示す通りである。社区管理施設は各社区にあるが、上位の政府機関である行政施設は、鯉城区の北部に集中している。一方、教育施設は高校 11、中学校 7、小学校 12、幼稚園 8、計 38 設けられているが、分布は偏っており、主城区の東北端、東端に集中している。

商業施設は、主に中山路、東街、西街、新門街、打錫街、南俊路一帯を中心に分布しており、小規模な個人経営店舗は基本的に道路に沿って建ち並んでいる。特に中山路、西街に分布するのは建物の 1 階部分が商店、2 階以上を住居とする店舗併用住宅、すなわち「店屋」がほとんどである。衣類の店が圧倒的に多いが、食料品や日用雑貨まで日常生活に関連する多様な業種が軒を連ねている。

宗教施設は 81 立地するが、全体的に分散している。開元寺、清淨寺、天后宮、文廟、承天寺など大規模な寺院が見られるが、圧倒的に数の多いのは街区レベルの寺廟である。鯉城区において、工業関連施設はほとんど民営の小規模なものであり、疎らに分布している。環城西路一帯に、紡績工場、建築金物、縫製などの町工場が多数立地している。

3-3 住居類型の分布

詳細調査地区の住居類型については、4 でまとめるが、住居類型は大きく 3 つにわけて考えることができる。第一に、「大厝 da cuo」^{注22)}と呼ばれる「四合院」が見られる。中国における「四合院」の形式は地域によって異なるが、泉州のものは北方地区のものより規模がやや大きく、建物の中央を入口とする。「大厝」は清以前に遡る伝統的な住居形式と考えることが出来る。「騎楼 qi lou」^{注23)}、「手巾寮 shou jin liao」^{注24)}は一般的に「店屋」あるいは「街屋」の形式である。「騎楼」は「亭仔脚」^{注25)}のついた店舗併用住宅をいい、東南アジアのショッピングハウスが逆輸入されたと考えられている^{注26)}。「手巾寮」は狭小間口のものといい、アーケードをもたない。土地の細分化が進行し、間口が狭い敷地に対して成立したと考えられる。

鯉城区について、伝統的な住居形式である「大厝」「手巾寮」「騎楼」の分布状況を示すと図 5 のようになる。泉州市城郷规划局が作成した地図（2007 年）で確認できる 993 棟のうち、「大厝」が 211 棟、「手巾寮」が 163 棟、「騎楼」が 619 棟である。

「大厝」は鯉城区の全体に分布しており、特に唐代「子城」であった区域内を中心に多数立地し、また城西、城南、北門街（朝天門）周辺にも密集している。すなわち、現在も中心部に支配的な住居形式として維持されている。ただ、北京のように整然と東西街路に接して「座北朝南」、すなわち南北を軸として配置されることはなく、街路（巷）に向けて、すなわち街路に直行するかたちで立地するのが特徴的である。

「手巾寮」は城南地区に集中している。かつては外国人居留地が形成されていた地区であるが、民国時代に造られた 2 階建ての店舗併用住宅が多く立地し、線状に分布している。現在、ほとんどの店舗は日常品を扱っている。また、西街にも疎らに立地し、ほとんどが平屋である。「騎楼」は、かつて城壁が位置する中山南路に集中しており、街路に直行して短冊状に分布している。また、近年急速かつ大規模な都市開発が進められ、集合住宅団地の形態が見られる。朝天門が位置する環城北路、北門街一帯に多く立地している。

また、新門街・涂門街沿いに中層集合住宅が林立している。

4. 通政・和平・海清・新峰・新春社区の空間構成

通政・和平・海清社区，隣接する新峰・新春社区からなる調査対象街区は，東は南俊路・百源路，南は新門街，北は東・西街，西は新華路に囲まれ，中山中路が南北を貫通している（図3，図6）。この区域は，唐代「子城」であった区域であり，旧城の城門遺構が西街沿いのところに残されており，旧街区の中でも「大厝」を中心とする伝統的な住居が数多く残されている。

4-1 街路体系

街路は，「街 jie」「路 lu」あるいは「巷 xiang」と呼ばれる。日本語のニュアンスでいうと，「路」「街」は「通り」，「巷」は「路地」である。街路のヒエラルキーは街＞路＞巷となるのが一般的である。その他，「街」「路」「巷」などを語尾に持たない「固有名称」の街路がある。街区には低層の住宅が密集して分布し，一見複雑な街路体系をしているように見えるが，街路は3つのランクに分けて考えることができる。第1は，街区を囲む主要街路，また，街区内部に縦横に走る主要街路である。第2は，それから分岐し主要街路同士を結ぶ2次的な街路である。第1，第2の街路によって，街区が細分化される。第3は，街区の内部へと分岐する街路である。街区内部に分岐する街路が巷である。

4-2 施設分布

行政施設，教育施設，医療施設などの公共施設，工場，事務所などの分布を図6に示す。行政施設としては，泉州市政府，鯉城区城市管理局，泉州市環境衛生局，泉州市労働社会保障局，泉州市国家安全局が立地する。大規模な政府機関は集中して新峰（B），海清（E）社区にあり，社区管理施設である居民委員会は各社区にある。社区に対応した派出所は新峰（B）と和平（D）社区で確認できる。教育施設は，高校1，小学校1，幼稚園3が立地する。医療施設は2つあるが，大規模のものは和平（D）社区にあり，個人営業のものが通政（C）社区に置かれている。

廟は，15が確認でき，大規模なものは3つあり，それぞれ新春（A）和平（D）海清（E）社区にある。また，キリスト教会が3つある。

公衆トイレは地区全体に分散して設置されているが，新春（A）社区に2ヶ所，新峰（B）社区に2ヶ所，通政（C）社区に1ヶ所，和平（D）社区に3ヶ所設置されている。

工業施設は，ほとんど民営の小規模なものであり，調査地区で10軒が確認でき，電子機械加工工場1軒が新峰（B）社区に立地する。商店は773軒が確認でき，そのほとんどが主要街路に面している。

そのうち服屋が449軒あり，商店全体の半数以上を占めている。

図5 鯉城区の住居類型分布

中山中路両側，東街，新門街，打錫街沿いに独特なアーケード街が形成され，服屋が密集している。また，南俊路ではスポーツウェアを扱う商店が集中している。西街沿いには，小売店，雑貨店，飲食店が数多く立地する。

商店は社区内部に立地することは少ないが，日常生活に関連する小売部^{注27)}は街区内にもよく見られる。

4-3 住居類型

調査地区において，大厝68軒，手巾寮35軒を確認できた。そのうち，伝統的と思われる33軒について実測調査を行った（図6）。

33軒の住居の居住者のプロフィールを表1に示す。建設年代を見ると，清末に遡るものが5（No. 5, 6, 7, 13, 32），それ以前のものが13（No. 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 21, 23, 24, 27, 28, 30）ある。居住者が40年以上居住するのが20（No. 3, 4, 7, 12, 14, 16, 17, 18, 19, 21, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33）ある。世帯主の大半（24軒）は泉州生まれである。

33軒の住居の平面構成を間口と奥行き，院子（中庭）の数によって類型化すると図7のようになる。2階建てが4軒（No. 2, 3, 7, 11）あるが，分類にあたっては主な生活空間となる1階部分の平面

構成に着目する。まず、構造壁で仕切られる「開間」(間口)数に着目すると、大きく次の4つに分類できる。

- I. 1列型：間口数が1のもの
- II. 2列型：間口数が2のもの
- III. 3列型：間口数が3のもの
- IV. 4列型：間口数が4のもの
- V. 5列型：間口数が5のもの

次に、院子(中庭)の数に着目すると、

- a. 院子を持たないもの
- b. 院子を1つ持つもの
- c. 院子を2つ持つもの
- d. 院子を3つ持つもの

の4つに分類できる。以上の2つの軸によって分類したのが図7である。20分類のうち、実際に見られたのは10タイプである。このうち、おおきくは、間口1,2(I, II)のものは「手巾寮」、間口3以上のものは「大厝」と分類できる。詳細調査地区の中山中路には騎楼はない。

「大厝」として、「三間張」あるいは「五間張」が区別される。それぞれ間口は3(III)ないし5(V)のものをいう。基本的にIIIが「三間張」である。

「三間張」の両側に「辺房」と「后房」を設けたものが「五間張」となる。そして、「三間張」「五間張」に「護厝(護龍)」という一列の部屋が加えられる場合がある^{注28)}。片側だけに「護厝(護龍)」が設けられたものが No.16, No.21, No.27 である。No.24 は、「五間張」に「護厝(護龍)」が付加されたものであり、No.31 は、「三間張」に「辺房」が加えられたものに「護厝(護龍)」が吹かされたものである。奥行き方向のスパンを数える「一進^{注29)}」は「下落」といい、間に「門庁」が配置される。「二進」は「頂落」または「上落」といい、使用人の居室、応接室などに用いられる。

「三進」は「后落」という。北京の四合院の「廂房」は泉州では「榉頭 ju tou」という。「東榉頭」は厨房、「西榉頭」は物置とし用いられる。「下落」「頂落」「榉頭」で囲まれた中庭は「深井 shenjing」という。「大厝」の「下落」の前部にある「石坪 shiping」を「埕 cheng^{注30)}」という。

「手巾寮」は、一般的に奥行きは深く、一般的に20メートル以上で、40～

図6 調査地区の施設分布

表1 調査住居居住者のプロフィール

建物番号	住居類型	階数	面積(m ²)	築年代	居住年代	所有形態(借家の場合実家)	家族構成	世帯主の生	宗教	出身地	職業
NO.1西街120A号	手巾寮	1	64.57	1930年代	25年	持家	夫婦+息子(3人)	40代	仏教	泉州市	宝くじ販売
NO.2西街50号	手巾寮	2	1F:49.35/2F:33.07	1930年代	10年	家賃800元	夫婦(2人)	30代	無	泉州市	文具販売
NO.3義巷39号	手巾寮	2	1F:84.33/2F:84.33	-	40年	持家	夫婦(2人)	67歳	仏教	泉州市	-
NO.4坪下環4号	手巾寮	1	86.93	-	52年	持家	母親+夫婦(4人)	78代	仏教	泉州市	-
NO.5天后寺5号	大厝	1	219.08	清末	3年未満	家賃400元	夫婦(2人)	50代	無	四川省	建設業
NO.6大厝巷17号	大厝	1	151.79	清末	2年	家賃500元	母親+夫婦(2人)	44歳	無	浙江省	掃除、娘は学生
NO.7象峰巷3号	手巾寮	2	1F:174.98/2F:49.36	清末	50年	持家	夫婦(2人)	70代	仏教	泉州市	無職
NO.8西街235号	手巾寮	1	93.08	-	30年	持家	夫婦(2人)	40代	無	泉州市	飲食店経営
NO.9西街277号	手巾寮	1	100.77	-	25年	持家	夫婦(2人)	50代	仏教	浙江省	飲食店経営
NO.10西街213号	手巾寮	1	26.37	-	8年	家賃1000元	母親+息子(2人)	30代後半	仏教	浙江省	厨房用品
NO.11西街153号	手巾寮	2	1F:65.74/2F:65.74	-	15年	持家	夫婦(2人)	37歳	仏教	泉州市	飲食店
NO.12西街149号	手巾寮	1	299.42	清末	42年	持家	夫婦(2人)	65歳	仏教	泉州市	自営業
NO.13三朝巷24号	手巾寮	1	285.9	1790年代	-	不明	不明	不明	無	不明	電線加工
NO.14旧館驛65号	大厝	1	312.31	1890年代	53年	持家	母親+息子(2人)	70代	無	泉州市	販売
NO.15旧館驛73号	大厝	1	448.21	1855年	6年	家賃350元	夫婦(2人)	39歳	仏教	安徽省	服装加工
NO.16旧館驛24号	大厝	1	272.85	1890年代	55年	持家	夫婦(2人)	78歳	無	泉州市	無職
NO.17旧館驛81号	手巾寮	1	94.6	1895年	40年	持家	夫婦+夫婦(3人)	40代	無	泉州市	販売
NO.18旧館驛79号	手巾寮	1	186.07	1895年	40年	持家	夫婦+夫婦(3人)	40代	無	泉州市	販売
NO.19新館驛24号	大厝	1+3	645.32	1860年代	58年	持家	父親+夫婦(4人)	83歳	仏教	泉州市	教加工
NO.20新館驛42号	大厝	1	152.24	1924年	23年	持家	夫婦(2人)	55歳	無	泉州市	社員
NO.21新館驛30号	大厝(護厝)	1	520.57	1853年	41年	持家	夫婦(2人)	53歳	仏教	泉州市	自営業
NO.22新館驛50号	大厝	1	242.43	-	1年	家賃500元	男性2人	35歳	無	四川省	新聞配達、販売
NO.23金魚巷84号	大厝	1	414.54	1850年代	3年	家賃400元	女性1人	41歳	無	遼寧省	服装加工
NO.24后巷3号	大厝(護厝)	1	580.74	1892年	80年	持家	女性1人	80代	仏教	泉州市	無職
NO.25新街口73号	手巾寮	1	90.16	1946年	44年	持家	母親1人	75歳	無	泉州市	無職
NO.26新街口67号	手巾寮	1	83.52	1920年代	60年	持家	夫婦(2人)	83歳	無	泉州市	モーター製造
NO.27新街口67号大厝(護厝)	大厝(護厝)	1	374.83	1901年	61年	持家	夫婦(2人)	61歳	仏教	泉州市	無職
NO.28仁義巷8号	大厝	1	396.25	1805年	42年	持家	1人	85歳	無	前臺州市	無職
NO.29后巷下9号	大厝	1	175.23	1956年	40年	持家	母親+夫婦(4人)	73歳	仏教	泉州市	-
NO.30錦華巷51号	大厝	1	377.56	1862年	51年	持家	夫婦+父親の兄弟(6人)	51歳	仏教	泉州市	公務員
NO.31永大巷91号	大厝(護厝)	1	677.95	1920年代	43年	持家	母親+夫婦(4人)	43歳	無	泉州市	無職
NO.32后巷16号	大厝	1	533.72	清末	55年	持家	夫婦(2人)	70代	仏教	泉州市	無職
NO.33通政巷8号	大厝	1	290.03	-	60年	持家	母親+夫婦(4人)	73歳	仏教	泉州市	自営業

一は不明

50メートルに及ぶこともあるが、狭小なものも見られる。2階建てのもの、の建築面積は総じて小さい。院子をもたないもの（Ⅰa、Ⅱa）は、また、院子を2つもつが狭小間口のもの（Ⅰc）は近年の住居類型である。また、33軒の平均延床面積は282.9㎡である。大厝の平均延床面積は376.7㎡であり、手巾寮の平均延床面積は102.1㎡である。

最も古いNo.13(Ⅱd)は「手巾寮」の形式で1790年代建設である。すなわち、「手巾寮」は、18世紀末には成立していたことが分かる。「大厝」で最も古いものはNo.28(1805)であり、調査したほとんどが清末以前に建設されたものである。

5. まとめ

本稿では、まず、泉州鯉城区の形成過程について概観し、その空間構成に関して、社区構成、街路体系、施設分布を明らかにした。そして、鯉城区全体について、「大厝」「手巾寮」「騎楼」の分布を明らかにした。それぞれの分布は、歴史的な中心部、城南部、南北幹線街路という都市形成の歴史に対応するかたちで残されている。さらに、中心に位置する通政・和平・海清・新峰・新春社区についての詳細調査をもとに住居類型とその分布について明らかにした。主要な点はおおよそ以下のようである。

①泉州には伝統的な住居形式として、大きく「大厝」「手巾寮」「騎楼」という3つの住居類型をみることができ、それぞれ、今日にまでよく維持されてきている。

②「大厝」は鯉城区の全体に分布しており、特に唐代「子城」であった区域を中心として多数立地し、また城西、城南、北門街（朝天門）周辺にも密集している。すなわち、かつての中心地区に多数分布し、歴史的街区の景観を今日までよく残している。北京の四合院と異なり、街路（巷）に向けて、すなわち街路に直行するかたちで立地するのが泉州の特徴である。「大厝」は、「三間張」と「五間張」が区別され、「護厝（護龍）」と呼ばれる一列の部屋が加えられる場合がある。

③「手巾寮」は城南地区に集中しているが、開元寺が位置する西街にも疎らに立地している。具体的な調査事例から「手巾寮」は18世紀末には成立していたことが明らかになった。

④「騎楼」は、かつて城壁が位置する中山南路に集中しており、

図7 住居類型

街路に直行して短冊状に分布している。

泉州における住居類型間の関係、住居形式の変遷については、「騎楼」「手巾寮」に関する既往の研究によるデータをさらに加えて、全116例について分析し、住居類型の変容パターンとして示したい。

参考文献

1) 愛宕松男訳：東方見聞録2, 東洋文庫, 平凡社, 1971
2) 斯波義信: 華僑, 岩波書店, 1995
3) 蔡互騏: 閩南「手巾寮」街屋空間構成之比較研究, 雲林科技大学碩士論文, 2006
4) 曹春平: 閩南伝統建築, 厦門大学出版社, 2005
5) 曹春平: 閩南建築, 福建人民出版社, 2008
6) 陳鵬鵬主編: 泉州文物手冊, 泉州市文物管理委員會編, 2000, pp.53~55
7) 陳泗東: 中国歴史文化名城—泉州, 福建人民出版社, 1991
8) 陳衍德, 卞凤奎: 閩南海外移民與華僑華人, 福建人民出版社, 2007
9) 陳志宏: 厦門騎楼建築初論, 華僑大学碩士論文, 1998
10) 戴志堅: 福建民居, 中国建築工業出版社, 2009

11) 黄漢民：『福建伝統民居，福建教育出版社，1994a
12) 黄漢民：福建民居の伝統特色與地方風格，福建教育出版社，1994b
13) 黄漢民：閩南民居建築文化的特性，福建教育出版社，1994c
14) 黄漢民：老房子—福建民居，江蘇美術出版社，1995a
15) 黄漢民：客家土樓，中国建筑工業出版社，1995b
16) 家島彦一訳：大旅行記 7，東洋文庫，平凡社，1971
17) 家島彦一：海城から見た歴史—インド洋と地中海を結ぶ交流史，名古屋大学出版社，2006
18) 林冲：騎樓型街屋の發展與形態的研究，華僑大学碩士論文，2000
19) 劉敦楨編：中国古代建築史，中国建筑工業出版社，1984
20) 茂木計一郎・稲次敏郎・片山和俊/東京芸術大学中国住居研究グループ：中国民居の空間を探る「群居類住—光・水・土—中国東南部の住空間」建築資料研究社，1991
21) 廖大珂：福建海外交通史，福建人民出版社，2002
22) 泉州港務局，泉州港口協會編：泉州港與海上丝绸之路，中国社会科学出版社，2005
23) 泉州歴史文化センター編：泉州古建築，天津科学技術出版社，1991
24) 泉州市城郷規画局，清華大学建築学院編：泉州市古城保護整治規画—基本資料編，2007. 6
25) 青井哲人：台湾の町家形式と比較の視点，日本建築学会，歴史意匠部門PD「東アジアから日本の都市住宅（町家）を捉える」，2007
26) 王建茂，陳麗華：中華海洋文化的縮影，泉州海外交通史博物館，1999，p.147
27) 王荣国：福建仏教史，福建科学技術出版社 1997，pp.5~7
28) 許在全：泉州古厝，福建人民出版社，2006
29) 許政：泉州近代與当代騎樓比較之研究，華僑大学碩士論文，1998
30) 楊思馨：近代泉州外廊式民居初探，華僑大学碩士論文，2002
31) 趙鵬：泉州官式大厝，華僑大学碩士論文，2004
32) 張至正：泉州伝統民宅形式初探，東海大学碩士論文，1996
33) 鄭妙豊：泉州西街地区小規模動態更新與保護設計模式初探，華僑大学碩士論文，2001
34) 政協泉州市委員会編：泉州名人故居，厦門大学出版社，2007
35) 朱啓明：閩南街屋建築之研究—以福建省泉州市中山路「騎樓式」街屋為例，雲林科技大学碩士論文，2004
36) 朱樸：泉州伝統民居基本類型の空間分析及其類設計研究，華僑大学碩士論文，2001

注

注 1) 泉州は中国福建省東南沿海部に位置する。約 150 キロ北東に福州，75 キロ南西に厦門（アモイ）がある。12 の市県区で構成されており，総面積は 11015 平方キロメートル，総人口は 774 万人（2007 年）である。漢族 98.2%，少数民族 1.8% で，閩南語が話される。アモイ語，龍岩語，大田語が閩南語とされる。
注 2) イスラーム世界の成立と海域を通じた国際商業ネットワークについては，家島彦一（1991）が精力的に明らかにしている。
注 3) 泉州はいくつの名称を持っている。泉州から見下ろすと，鯉の形のように見え，「鯉城」と呼ばれる。また，低緯度に位置し，温暖湿潤気候であることから「温陵」とも呼ばれた。さらに，五代（907～960 年）に晋江王（留從效）によって，泉州城が改築され，城内に「刺桐」（デイゴ）を植えたことから，「刺桐城」と呼ばれた。ザイトゥーンは，「刺桐」に由来する。
注 4) 宋代には中国南方の城鎮における一般的な住居類型になっていたと考えられる。歴史的な語彙としては，他に「市屋」がある。こうした華南，閩南の店舗住宅が東南アジアの華人街でも用いられ，それを植民地政府が都市型店舗住宅のモデルとして公認すると，さらに広く東南アジア各地へ移出されていったと考えられる。こうしたプロセスの中で「店屋」の英訳として shop house という語が生まれた。
注 5) 「街」は街路，あるいは都市的な場を表す。日本語では「町屋」である。
注 6) 調査者は，2008 年は，趙冲，布野修司，川井操，石川智章，2010 年は，趙冲，布野修司，于航である。
注 7) 主に所有形態，家族構成，宗教，出身地，職業などについてヒヤリングを行った。
注 8) 中国五代十国時代の十国のひとつ閩の政権である。王審知が初代国王。885 年，兄の王審邽，王潮と共に寿州（現在安徽省寿县）の首領であった王緒に従い福建に転戦，896 年に王潮は唐より軍節度使に追認された。翌年に王潮が死んで王審知が後を受け継いだ。王審知は内政に力を入れ，福建の開発を進めて，大きく発展させた。
注 9) 福建省地方志編集委員会編，『福建省歴史地図集』（2004）所収の図をもとに作成した。

注 10) 1 丈＝10 尺＝100 寸である。唐代において 1 歩＝6 尺。1 尺約 31.3cm である。
注 11) 泉州市城郷規画局，清華大学建築学院編（2007）
注 12) 泉州開元寺は，もともと蓮花寺の名で 686 年に創建されているが 738 年玄宗の詔勅により開元寺と改称された。特に東西にある二つの石塔で，石塔としては中国で最古層に属し，南宋期のものである。一般的に中国の寺院は，山門・天王殿・大雄宝殿という構造を持つが，古い遺構を持つ寺院では異なる配置を持つ。この開元寺でも，本来天王殿は無かったと思われる構造を残す。ヒンドゥー教の影響としては，ヒンドゥー神話のモチーフを持った幾つかのレリーフが本殿の後部の石柱部分に残されている。
注 13) 宋代は 1 尺約 0.309～0.329m とされる。明代は 1 尺約 0.32m，清時代（公元 1840 年以前）は 1 尺約 0.31m とされる。
注 14) 東に仁風門，西に義成門，南に鎮南門，北に朝天門，東南に通淮門，西南に臨漳門および通津門の 7 城門。
注 15) 泉州市城郷規画局，清華大学建築学院編（2007）
注 16) 清淨寺は，『泉州府志』の記載によれば，南宋の紹興元年（1131 年）に，ムスリムのツシル・ウッディーンがサナウエイから泉州に来て建てたもので，その後，元の至正年間（1341～1376）にイスラーム教徒のキン・アリ（金阿里）が再建し，明・清時代にふたたび修復された。この寺の平面形式は四合院形式をとる中国国内の多くの清真寺とは違って，ほとんど漢民族の建築の影響を受けていない。すなわち，配置において「左右対称」を重視していない。
注 17) 中国古代から，「隅」という文字がよく使われてきた。例えば，『考工記・匠人』により，「宮隅之制七雉，城隅之制九雉」という文章がある。元々，壁の意味を指すが，ここでは，十字街から東隅，西隅，南隅，北隅の 4 つの行政区域に分かれた。十字街の中央は「隅首 yu shou」という。
注 18) 1922 年 3 月，泉州工務局が設立された。周醒南は局長に就任し，泉州城を改造，「騎樓」建設に大きく関わる。
注 19) 『泉州市古城保護整治規画』により，「四横四縦一環」という街路は泉州都市における最も主要な幹線街路である。「四横」は東街から西街まで，九一街から庄府巷まで，涂門街から新門街まで，泉秀西路から義全街までの 4 街路を指す。「四縦」は温陵路，南俊巷から百源路まで，北門街から中山路まで，新華路の 4 街路を指す。「一環」は環城北路，環城西路，江濱北路，温陵路および少林路の 5 つ街路である。
注 20) 泉州市の中心区であり，総面積は 6.71 平方キロメートル，総人口は 13.4 万人（2007）である。
注 21) 現在，鯉城区は開元街道，鯉中街道，海濱街道，臨江街道の 4 つの街道弁事処で構成されている。
注 22) 閩南において家のことは「厝」cuo という。起厝は家を建てる，厝税は家賃，厝益は屋根，厝主は大家を意味する。閩南語の発音は「厝」su となる。伝統的四合院で，泉州地区（晋江，石獅，惠安，南安）の「大厝」は西晋の戦乱の際に中原からの移民たちによって持ち込まれたと考えられている。
注 23) 「騎樓」は北京語であり，『辞海』によると，雨除け，日除けの空間としての役割を持ち，街路に面する一階前面の外壁を建物の境界面からセットバックして，その部分を柱廊（歩道）にし，柱廊に支えられる二階以上の部分は歩道に跨るように建てられた建築をいう。間口は 4～6 メートル程度で，左右の壁は隣戸と共有すること多い。
注 24) 間口の狭い（「狭長式」）店舗併用住宅である。すなわち都市型の店舗併用住宅をさす用語として使われる。左右の隣戸が壁体を共有し，平面は間口が 1 丈 6 尺ないし 1 丈 8 尺（約 4.8～5.4m）程度しかないのに対して奥行きは非常に深く，三進ないし，四進に及ぶこともある。このため，泉州で「手巾寮」（手巾＝てぬぐい）と呼ぶ。広東では「竹筒屋（zhu tong wu）」と呼ぶ。福州では「紫欄厝」という。
注 25) アーケード状の歩廊のこと。
注 26) 「騎樓」が見られるのは泉州，厦門，漳州，龍岩（福建省），広州（広東省），北海（広西省）である。
注 27) 小売部（xiao mai bu）とは，自家の一部を利用して，個人で経営する間屋である。主に日常用品，酒，タバコ，調味料などを販売している。基本的には，公衆電話も置かれる。
注 28) 「三間張」と「五間張」の東西両側に「護厝」が配置されると，「三間張双辺護」と「五間張双辺護」と呼ばれる。
注 29) 「大厝」では「落」を使い，街屋では「進」を使うことが多い。
注 30) 樹木などのない石庭を意味する。

（2011 年 3 月 3 日原稿受理，2011 年 7 月 20 日採用決定）